
SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS

No.139 November 2014

研究の最前線

◆ 2014 年度冬期国際シンポジウム ◆
ポーター
「境界：ユーラシアで交差する動力」開催予告

今年度の冬期国際シンポジウムは12月4日(木)～5日(金)にセンター4階大会議室で開催されます。センターに事務局を置く境界研究ユニット(UBR)を基盤として、センターでは複数の境界研究関連プロジェクトが動いており、我が国全体での境界研究の進化の牽引役を果たしております。今回の国際シンポジウムは、その中でも、科研費基盤研究A「ポータースタディーズによる国際関係研究の再構築」、学振実社会対応プログラム「国境観光：地域を創るポータースタディーズ」、トヨタ財団研究助成「放射能汚染地域の文化保全と避難者の心の救済：チェルノブイリと福島」、センタープロジェクト型公募研究「戦間期の国際秩序形成におけるソ連の役割：その周縁部の構造と現実」の中間成果報告、学振二国間交流事業「ロシア最後のエネルギー・フロンティア：極北地域の持続的発展への挑戦」のキックオフも兼ねています。

初日第1セッションでは国境観光、第2セッションでは原子力災害と移住者、2日目第4セッションでは北極圏航路という、センターが近年力を入れている研究テーマでのセッションが組まれました。2日目第5セッションでは、今般のウクライナ危機により境界が動いたことで大きく変容したロシアの国際関係について議論します。その他、地域研究と境界研究の関係についてのラウンドテーブル、また、歴史的パースペクティブからソ連外交を扱ったセッションも組まれています。センターHPで参加登録の上、ふるってご参加いただきますようお願い申し上げます。英語版プログラムは以下のとおりです(報告タイトルは変更の可能性があります)。[地田]

Border Power! Crosscutting Forces at Play in Eurasia

Dec. 4, 2014

Opening Remarks: 9:00-9:20

Opening Session: 9:20-10:20 The Political Geography of Borders

Keynote Speaker: Sergey GOLUNOV (SRC) "Practical Relevance as an Issue for the Contemporary Border Studies"

Moderator: YAMAZAKI Takashi (Osaka City University)

Session I: 10:30-12:45 Border Tourism: Northeast Asia & Middle East

HANAMATSU Yasunori (Kyushu University) "Developing Tsushima-Busan Tour: First Model of Border Tourism in Japan"

YANG Cheng (China East Normal University) "Normality of Non-Normality: Sino-Russian Cross-Border Tourism Cooperation in the Post-Soviet Era"

TAKAMATSU Kuniko (Hokkaido University) "Community Based Tourism as a Potential Tool for Reducing the Impact of Borders in the Occupied Territories: Tourism Activity Initiatives by Local Communities in Palestine"

SHIM Sang Jin (Kyonggi University, Korea) "Border Tourism Development in Two Koreas"
Moderator & Commentator: KAWAKUBO Fuminori (Chuo Gakuin University)

Session II: 14:00-16:00 Moving People around Catastrophe: Incentive and Consequence

ASANO Toyomi (Chukyo University) "The 'Birth' of the Fukushima Nuclear Power Stations and the Dynamics of Migration, Repatriation and Resettlement after WWII"

Dávid KARÁCSONYI (Geographical Institute, Hungary) "Chernobyl and Fukushima 'Zones': Demographic Trajectories after the Nuclear Disasters"

Commentator: SHINOHARA Taku (Tokyo University of Foreign Studies)
Moderator: IEDA Osamu (SRC)

Session III: 16:15-18:15 Borders Make Area Studies (Round table)

Speakers: HACHIYA Machiko (Kyushu University); TAMURA Keiko (Kitakyushu University); YAMANE So (Osaka University); Krishnendra MEENA (Jawaharlal Nehru University, India); CHIDA Tetsuro (SRC)

Moderator: IWASHITA Akihiro (SRC)

Dec. 5, 2014

Session IV: 10:00-12:00 Socio-Economic Impacts of the Northern Sea Route: Perspective of Norway, Russia and Japan

Rune RAFAELSEN (Norwegian Barents Secretariat) "The Northern Sea Route: Geopolitical Impact"

Vladimir SEMENOV (Central Marine Research and Design Institute, Russia) "IMO Future Polar Code, Rules of Navigation in the Water Area of the Northern Sea Route: Issues Awaiting Settlement"

OTSUKA Natsuhiko (North Japan Port Consultants Co., Ltd.) "Northern Sea Route, Its Feasibility and Current Status"

Commentator: OHNISHI Fujio (Nihon University)
Moderator: TABATA Shinichiro (SRC)

Session V: 13:15-15:15 Borders Reshape International Relations on Russia

Mikhail ALEXEEV (San Diego State University, USA) "Blocs, States, and Borders: Explaining Territorial Status Quo and Revisionism in Russian Foreign Policy"

Marek MENKISZAK (The Center for Eastern Studies, Poland) "Borders in Flux: Ukraine as a Case Study of Russia's Approach to Its Borders"

ZHAO Huasheng (Fudan University, China) "Sino-Russian Cooperation in Central Asia and the Far East"

Commentator: KATO Mihoko (Japan Society for the Promotion of Science, Keio University)
Moderator: David WOLFF (SRC)

Session VI: 15:30-17:30 Making a New Order in Eurasia: Soviet Interwar Diplomacy Seen from Inside and Outside

MIYAZAKI Haruka (Hokkaido University of Education) "The USSR Foreign Policy Seen from Poland: On E. Romer, 'The Great Statistical and Geographical Atlas of Poland' (1921)" (tentative)

Yaroslav SHULATOV (Hiroshima City University) "Soviet Russia at the Far East: New and Old Approaches in Foreign Policy"

Alexandr LIVSHIN (Moscow State University, Russia) "Public Mood and Soviet Foreign Policy in 1920s: The Issue of Trust"
Commentator: IKEDA Yoshiro (The University of Tokyo)
Moderator: NAGANAWA Norihiro (SRC)

◆ JIBSN : ◆

◆ シンポジウム「日本初の国境観光を創る：北海道・稚内の挑戦」の開催 ◆

7月に福岡で開催された対馬での国境観光についてのシンポジウムに引き続き、10月2日(木)にホテル札幌ガーデンパレスにて「日本初の国境観光を創る：北海道・稚内の挑戦」と題するシンポジウムが開催されました。稚内とサハリンを結ぶ国際フェリーの撤退報道がなされた直後ということ、またJIBSNの主要メンバーでもある稚内市の工藤市長が急遽参加を決められたこともあり、定員80名をはるかに上回る130名の参加者があり、北海道のメディアでも取り上げられ、大きな反響がありました。今後の北海道による支援に向けた取り組みが期待されています。[岩下]

◆ セミナー《Seeing History: Photo and Film as a Primary Archival Source》 ◆
おこなわれる

8月25日、センター小会議室において、SRCセミナー『歴史を見る：アーカイブ資料としての写真と映画』がおこなわれました。これは、6月のセンターのバーベキューパーティのうちに、写真や映画を研究の資料や手法として活用している外国人研究員と、たまたまカラー写真の歴史に興味を持っていたセンター研究員とが、ビールの勢いで企画したものです。

当日はロシア語と英語を交ぜて以下のような発表がおこなわれました。

- 「帝政末期ロシアの政治写真と戯画」：ディリャラ・ウスmanoヴァ (カザン連邦大学：センター客員)
- 「プロクーディン=ゴールスキーの『祖国学』におけるカラー写真の活用」：望月哲男 (SRC)
- 「ソ連期およびポストソ連期クルグズスタンの女性解放史と『誘拐婚』研究におけるドキュメンタリーフィルム作成とアーカイブ調査の補助的利用」：グルザト・エゲンベルディエヴァ (トロント大学)
- 「満洲のビジュアル・ヒストリーから」：トマス・ラフーセン (トロント大学：センター客員)

時代的にも地域的にも異なった対象を題材にしての、ビジュアル歴史学の例示となったのですが、誕生して2世紀にもならない写真と、1世紀強の映画という近代的メディアが、我々の歴史的想像力にも強い影響力を持ち、それ自体が歴史研究の素材・対象ともなれば、また道具・手法ともなるという、興味深いことがらが実感されました。当日は20人ほどが参加し、歴史資料および研究メディアとしての映像の特殊性をめぐって、活発な議論がおこなわれました。もちろん事後に有志でビールを飲みに行きました。[望月]

◆ シロンスク大学の研究者来訪 ◆

10月29日(水)に、シロンスク大学のポーランド学研究者がセンターでセミナーをおこないました。今回訪問されたのは、ヨランタ・タンボル教授、ロムアルド・ツダク教授、エヴァ・スワフコヴァ教授、マグダレナ・パストゥフ教授でした。セミナーでは時間の関係もあり、タンボル氏が「シロンスク語の規範化に関する諸問題」、スワフコヴァ氏が「チェスワフ・ミウォシュの詩作における固有名詞の役割」という題目で報告されました。ツダク氏とパストゥフ氏は討論者として参加されました。シロンスク大学の関係者からはセンターとの共同研究も含めた連携強化が提案され、センターにおけるポーランド研究の新展開が期待されます。なお、

本セミナーの組織に当たり、本学情報科学研究科のラファウ・ジェプカ氏および本学文学研究科の佐光伸一氏に多くの助力を得ました。この場をお借りしてお礼申し上げます。[野町]



◆ 専任研究員セミナー ◆

10月1日：長縄宣博「終章 地域大国と向き合う個人」山根聡、長縄宣博編『越境者たちのユーラシア（シリーズ・ユーラシア地域大国論5）』に収録予定；「終章 ロシア近現代史の視点から」小澤実、長縄宣博編『北西ユーラシア歴史空間の再構築（スラブ・ユーラシア叢書）』に収録予定。

コメンテータ：宇山智彦（センター）

2012年から学術論文以外の文章も提出できるようになり、その場合コメンテータも内部の専任に依頼できるようになりました。今回は、報告者が編集に関わっている二冊の論集の終章が取り上げられ、テーマが最も近い宇山氏がコメンテーターを引き受けました。

『ユーラシア地域大国論』の第5巻は、越境者やマイノリティと互恵的な関係を結びながら、これらの人々を効果的に動員できる能力を持つ地域大国の姿に迫るものです。その終章は、有名無名の個々人の伝記を比較地域大国論の方法として提起するものでした。具体的には、国境や専門分野の敷居に沿って個人の生涯を裁断することなく、彼・彼女が身を置いた時空間を可能な限り復元するというものです。ただ、本巻所収の個性豊かな論文すべてに言及する必要性から、論理展開に無理が生じているようです。

「ロシア近現代史の視点から」は、9世紀のキエフ・ルーシから800年間の北西ユーラシアの変動を切り取る論集のまとめとして、19世紀から現代に至る流れを概観し、その中で本書の論点を振り返るものでした。とくに、北西ユーラシアの両端ともいえるヴォルガ・ウラル地域とドニエプル川西側のウクライナを取り上げ、さらにロシア帝国とオスマン帝国の間を往来した人々の軌跡、そしてナショナリズムが引き起こした暴力とその帰結を描くものでした。この終章については、「北西ユーラシア」はそもそもどこなのかということが議論の焦点になりました。これは編者の小澤さんとも再度詰めなければならない点ですが、センター自体が「ユーラシア」を名乗るようになって今、この概念を用いて我々自身がこれから何をすべきなのか考える機会になったように思います。[長縄]

◆ 研究会活動 ◆

ニュース 138 号以降、センターでおこなわれた諸研究会活動は以下の通りです。ただし、今号で独立して紹介したものは省略します。[大須賀]

- 8 月 15 日 **大谷崇** (早稲田大・院)「戦間期ルーマニア思想史におけるシオランと『シオラン』の誕生」(鈴川・中村奨励研究員研究報告会)
- 8 月 28-29 日「プラトンとロシア」研究会 **鳥山祐介** (千葉大)「エカテリーナ二世時代のプラトン受容とシニェルバートフ」;**下里俊行** (上越教育大)「ニコライ・ナデージュエンとロシア民族学におけるプラトニズム」;**兎内勇津流** (センター)「オットー・ビスマルクとロシア」;**金山浩司** (センター)「宇宙を鳴り止ませよ: 20 世紀物理学におけるピュタゴラス主義とソ連での反発」
- 9 月 16 日 研究会「戦争と社会主義のメモリスケープ」**越野剛** (センター)『『フランツとポリーナ』を観る: 独ソ戦争映画におけるドイツ兵」;**田村容子** (福井大)「中国の戦争映画における〈鬼子〉と〈奶子〉」;**坂川直也** (京都大)「抗米救国 (ベトナム) 戦争映画におけるアメリカ兵の表象」
- 9 月 19 日 **Gilles Campagnolo** (フランス国立科学研究センター) “Questioning Liberalism In Between East and West” (SRC セミナー)
- 10 月 2 日 **Paul du Quenoy** (ペイルート・アメリカン大、レバノン) “From Steppe Conflict to Imperial Context: The First Russian Designs on the Ottoman Levant, 1768-1774” (SRC セミナー)
- 10 月 7 日 **Irina Papkova** (ジョージタウン大、米国/センター) “Conflicting Historical Interpretations of World War II and Their Effect on the Present Ukrainian Crisis” (SRC セミナー)
- 10 月 8 日 第 10 回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会 **越野剛** (センター)「ペラルーシ、存在しなかった国の文学史」
- 10 月 17 日 **秋月準也** (北大・院)「さまよう戯曲『ゾーヤ・ペーリツのアパート』: 劇作家と劇場、あるいは現実と幻想のはざままで」(ユーラシア表象研究会)
- 10 月 22 日 **屋良朝博** (沖縄タイムス元編集委員)「米軍基地・沖縄の境界」(UBRJ セミナー)
- 10 月 25 日 一緒に考えましょう講座 **関口裕士** (北海道新聞)「原発事故と新聞報道: 取材現場からの報告」
- 11 月 1 日 特別研究会「北サハリンの歴史と現在: 村上隆没後 10 年を記念して」**エドワルド・パルイシェフ** (筑波大)「北部サハリンと『イワン・スタヘーエフ商会』の実業活動 (1915 ~ 1925 年)」;**寺島敏治** (元釧路市史編纂事務局・地方史研究協議会)「岡栄『サガレン日記』に見るオハ: 1934-1936」; ラウンドテーブル「村上隆著『北樺太石油コンセッション 1925-1944』をめぐって」[パネリスト:**原暉之** (北大名誉教授)、**天野尚樹** (センター)、**白木沢旭児** (北文学研究科)]
- 11 月 5 日 **山崎佳代子** (ベオグラード大、セルビア)「セルビア現代詩と戦争」(SRC 特別セミナー)

人事の動き

◆ 仙石学氏の着任 ◆

仙石学氏が 10 月 1 日付で教授として着任されました。氏は 1964 年生まれ。1987 年に東京大学教養学部教養学科を卒業した後、同大学大学院総合文化研究科 (国際関係論専攻) に進学しました。センターとのおつきあいは古く、仙石氏は大学院修了後の 1995 年に、最初の重点領域研究 COE 非常勤研究員としてセンターに 9 ヶ月間勤務しました。翌年の 1996 年から福岡の西南学院大学法学部に赴任され、以来、比較政治学・国際政治学の担当教員として教鞭をとっておられました。

専門は比較政治経済論、福祉政治論、および比較方法論で、近年は中東欧諸国のポスト社会主義期における福祉制度の改編の比較分析や、新興民主主義国における経済政策の地域間比較分析などを主たる研究の対象としています。センターでは対象



をポスト社会主義国全体に広げた福祉政治比較や、スラブ・ユーラシア地域と他の地域の政治経済の多面的な比較を中心とした研究をおこなおうと張り切っています。[家田]

北海道で過ごした夏

デイヴィッド・マープルス(アルバータ大学/センター 2014 年度特任教授)



小樽運河で（マープルス氏と夫人の文さん）

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターに滞在したのが私にとって初めての日本だったわけではない。初めてどころか、それまでも本州の各地や沖縄などに8回ほど訪れたことがある。私の妻の文^{あや}は神戸生まれで、両親と兄弟は今もそこに住んでいる。そんなわけで、スラ研の大須賀さんと何度もやりとりをしたおかげもあり、カナダはアルバータ州エドモントンから東京経由で千歳空港に到着した際、これから見るだろう物事については、率直に言って予測ができていた。

札幌は北海道では飛びぬけて大きな都市である。活気に満ちた賑やかな街は、あちこちに広々とした公園が設けられ、中心街の大通りには心地よい緑地帯があって、夏にはテレビ塔の影の下でサービスの行き届いたビアガーデンが開かれる。交通機関は便利だし、多くの人が利用しているように、自転車で移動して回るのも楽でよい。とはいえ自転車は車道よりも歩道を好んで、歩行者の間をすり抜けながら走るのである（私もその一人となった）。

文と私は中島公園を見下ろす場所にあるアパートを住居に選んだ。そこは見晴らしのよいところで、7階に住む私たちは一方の窓からは藻岩山、もう一方からは公園を見渡することができる。夕日の眺めは格別に素晴らしかった。アパートには二つも寝室があったが、冷房があるのは小さいほうの寝室の隣にある居間だけだった。北海道大学は中島公園から地下鉄で4駅なので、毎朝の通勤の出だしは公園の池のそばを、職場に着く前は大学のキャンパスの中を気持ちよく散歩することができた。

スラ研はテニスコートを見下ろす連結した建物の一角にある。初めて訪れる人にとっては図書館を通して入るのが分かりやすいが、やがて私はいくつかの近道を見つけ出した。スタッフは人当たりがよくて親切だった。ベラルーシとロシアの文学を研究している世話役の越野さんは、図書館と研究所内の案内をしてくれた。私は最上階の5階に、パソコン、ソファ、小テーブル、椅子、デスクのある大きな部屋をもらった。5階では専任教員と外国人研究員が仕事をしている。私がまず知り合いになったのは、田畑さんと御夫人の朋子さん（お二人とはアメリカに共通の友人がいる）、望月さん、そしてカナダの同僚、トロント大学のトマス・ラフーセンだ。彼はハルビンについてのドキュメント映画を準備していた。

スラ研の家田修センター長は、御夫人の裕子さんと同じように、気遣いの素晴らしい人で、文と私が大学院生や若手研究者と知り合いになる親睦の場を何度も設定してくれた。そうした催しの多くは二階にあるセンター長室で行われた。私たちはそこで元センター長の人類学

者にもお会いした。北海道やそのすぐ北にあるサハリン島南部のアイヌについての話で私たちは大いに楽しませてもらった。彼が研究の対象としたプロニスラフ・ピウスツキ（ユゼフの兄）は、流刑の間にアイヌの生活を調査した（アイヌの村に住んでアイヌの女性と結婚した）という。アイヌは日本の先住民だったが、やがて北方の島への日本帝国の進出と占領に屈してしまう。

北海道大学を夏に訪れた人は次の二つの点に気がつくだろう。まず第一にはカラスの存在である。北アメリカのカラスとはちがって、獯猛なくちばしをもった大きな鳥だ。奴らは大勢で群れを成している。アルフレッド・ヒッチコックの往年のホラー映画『鳥』も見劣りするほどの光景だ。奴らはそこに巣をつくっており、明らかにそのせいで侵入してくる者に敵意をむき出しにする。今までの人生でカラスが人を襲うなんて考えもしなかったのだが、奴らは実際に襲ってくるし、しばしばペアを組んで急降下爆撃を仕掛けてくるのだ。大学当局が巣を除去するまで、1階の入口を通してセンターに入るのは非常な危険をとまなうことだった。その後、恐れを知らないカラスの軍団はテニスコートの近くに再結集した。これが第2の問題点とつながってくる。

学生たちは昼間のテニスコートに集まってくる。彼らはおそらくテニスと思われるゲームに興ずる。しかし実際はもっと複雑怪奇なものである。時には6人が同時にゲームに加わることがあるし、その他にも男女の応援団がイカレたポゴダンスのようにびよんびよん跳びはねたりもする。さらに選手たちはうなり声による符丁を共有している。その響きは羊と怒った牛の鳴き声の間くらいだ。最初のうなり声は別のグループの発声によって繰り返される。叫び声は朝早くに始まって、私が職場を去る夜まで続き、時には土砂降りの雨にすら影響されない。田畑さんはある時点で苦情を訴えたようだが、返ってきた通知によると、うなり声は学生の伝統であり、田畑さんは慣習を理解していなかっただけということらしい。率直に言って私も理解はできないけれど、うなり声と共存することを学んだ。

私たちは早々とこの素敵な街を探検して歩いた。札幌は冬のリゾートだけれど、夏もまた様々な催しがあって楽しい。見ごたえのある花火大会、ジャズやフォークのコンサート、神社のお祭り、中島公園の立派なコンサートホールで開催される演奏会、ラーメン店、ススキノのナイトクラブ。そして、日本の有名銘柄であるサッポロ、アサヒ、麒麟などを注文して、昼の屋外で飲む冷たいビールはもちろん外せない。私たちは藻岩山の年間パスポートを購入した。都合3回、ロープウェイとケーブルカーを乗り換えて頂上に登り、都市を見下ろす素晴らしい眺望を楽しんだ。昼の眺めと夜景の両方ともである。



天狗山登山

家田先生と裕子さんは、文と私を小樽にある自宅に招いてくれた。日本海のある西に向かって一時間ほど電車に乗った。最初に訪れた魚市場では、マグロ、ウニ、カニなどが並ぶびっくりするような光景を見ることができた。私たちは後でハッカクを試しに食べてみた。

小樽で私は家田先生と学生や若手研究者のグループのエクスカージョンに同行した。最初の行き先の天狗山では、やはりロープウェイに乗って行くと、頂上には博物館がある。私は

京都でも天狗に遭遇したことがあるが、ここの方が天狗の伝説をうまく生かした展示になっているように思えた。博物館には大量の天狗が収められており、そのどれもが例の大きな鼻を備えている。日本版のピノキオといったところだろうか。ただし伝承が本当だとしたら、天狗の鼻は幸運をもたらすようだ。私は学生たちと一緒にロープウェイの建物の外にある天狗の像の鼻をなでた。偶然ながら伝説上の天狗は人間と猛禽の特徴をあわせ持っているというので、先述したカラスの出来事もこれで説明がつくのかもしれない。

日本海の眺めは忘れがたい。遠くをフェリーが南の舞鶴に向けて乗客を運んで行く。家田先生によると30時間はかかるという。北西の方角にはロシアがある。遅くなったけれどここで私の道連れを確認しておこう。森下さん、金山さん、川瀬さん、カマロフさん、それに中国の留学生が一緒だった。そのほかに家田先生とお嬢さんの亮子さんが加わる。中国人たちは日本語と多少の英語を話すことができた。

天狗山の次に私たちはバスに乗って、ニシン御殿を訪れた。小樽市の中心から離れており、水族館に近いところにある。最後に見学を予定していたのは1904～05年の日露戦争後に両国の使節団が会合した建物だったが、閉鎖されていたので、北海道で唯一という小樽市内のモスクを訪問した。そこで私たちはパキスタンから来たという二人の男性に迎えられた。私たちはコーラとセブンアップをふるまわれ、モスクの絨毯の上でメッカの方を向いて飲み物をいただいた。その合間に、年配の男性の娘さん（アメリカで教育を受けたという）がモスクの活動について解説してくださった。



洞爺湖を背景に

8月に文と私はレンタカーを借りて洞爺湖を訪れた。壮観な姿を見せる火山と湖のある地域で、札幌からはちょうど2時間の距離だ。私たちは丘の頂に坐するウィンザーホテルで素晴らしい食事をとった。私たちは温泉が魅力的な登別と山奥にあるクマ牧場にも出かけた。熊が後ろ足で立ちあがり、観光客が自販機から300円で購入できる餌をねだるというシュールな環境だった。

文も私もスラ研の同僚たちの専門知識と研究設備にお世話になった。大学図書館はスラブ地域の立派なコレクションを有しており、私が研究しているウクライナについてさえ、私の所属する大学と同

じくらの資料を持つ。つまりそれは北米にある図書館の大多数よりも優れているということだ。初めのうちは蔵書の検索に時間がかかるが、調べるかいはあった。私にとってのハイライトは毎月の大学院生セミナーだった。これは斎藤さんが企画していて、カザフスタンのアセリ・ピタパロヴァさん、辛嶋さん、後藤さん、森下さん、河津さん、それにアフリカから来た経済学部博士課程のジョン・カレンガさんたちが出席していた。

7月にはスラ研で1914年から45年にかけてのユーラシアの「危機の30年」に関する大きなシンポジウムが開催され、アメリカ、イタリア、トルコ、そして日本の各地から研究者が参加した。刺激的で熱のこもった2日間の後には、アイヌ博物館と北海道開拓の村という1868年から1926年にかけての時期の北海道各地の建物を集めた野外博物館へのエクスカッションが企画されていた。バスの中で愉快的な英語の通訳をしてくれたのは、主催者であるスラ研の宇山さんと地田さんだった。

文もウクライナのユーロマイダンに対するカナダの反応とウクライナ人移民コミュニティの役割という彼女の最近の関心に近いテーマで報告を行った。全体として文と一緒にいるおかげで信じられないくらい楽に暮らすことができた。一人で来たらわけが分からなかっただろうことが理解できたし、いろいろな場所を訪れることができた。彼女自身もシンポジウムに出席して議論に加わり、スラ研とその活動によく適応していた。とはいえ彼女の姿がよく見られたのはどちらかといえばキャンパスに近いゴージャスな大丸デパートの方だったけれど。

スラ研に来て仕事をするというのは、理想的な環境でほとんど邪魔されることなくプロジェクトを仕上げるには又とないチャンスである。実際、教授たちはたいがい研究室に閉じこもってピーバーのように日が暮れるまで働いている。何かで困ったときに私がまず連絡をとるのは事務室の阿部さんだが、彼女はどんな些細な問題でも手助けを惜しむことはなかった。文と私は阿部さんご主人でスラ研の文化人類学者の後藤さんと仲の良い友達になった。私がスラ研で過ごした比較的短い期間は、要は夏の間だけだったけれど、驚くほどに生産的に過ごすことができた。ウクライナのユーロマイダンについての本の編集をほぼ終わらせただけでなく、長めの論文をひとつと多くの短い文章を書くことができた。

数々の親睦の場も特筆すべきだろう。スラ研の夏のバーベキュー、学生たちと一緒に出かけた2回の散策(2度目はJR札幌駅そばのラーメン屋で締めくくった)、田畑さんと池畑周直美さん(大学教員で、バンクーバー生まれのコリアン系女性)と一緒に参加した土曜の朝の激しいサッカー。トマス・ラフーセンと共同でカナダ建国記念日のお祝いを主催して、白鐵製のジョッキでローウェンブレイが飲めるドイツ風のパブにセンターの教員と院生を招いたこともあった。



カナダ建国記念日のお祝い

最後の親睦の席は、スラ研で唯一の女性教員(いちばんの若手でもある)の高橋沙奈美さんと御主人でアゼルバイジャン研究者の立花優さんを私たちのアパートに招いての晩さん会だった。私たちがスラ研を去る前日の8月28日のことである。沙奈美さんには「マーブルズさん、ありがとう」というメッセージで飾られたケーキをいただいた。しかしながら感謝すべきなのは私のほうではないだろうか。札幌での世話役や新しい友達の皆さんに対して、そして複雑な過去を持ち、伝統と近代が融合し、丁重さと形式性とワイルドな気ままさが対照をなすこの特異な国に対して。ありがとうございます、またお会いしましょう!

(英語から越野訳)

学 界 短 信

◆ UBRJ : ◆

Call for Papers 57th ABS Annual Conference in Portland

北米発祥のボーダースタディーズの国際学会である Association for Borderlands Studies (ABS) の第 57 回年次大会が、2015 年 4 月 8 日 (水) から 11 日 (土) まで、アメリカ・オレゴン州ポートランド市で開催されます。次回の大会は、“Border Studies and the New World (Dis)order: Relating Theories and Practice” というタイトルの下でおこなわれます。センター教授／UBRJ リーダーの岩下明裕が副会長としてプログラム委員会を率いており、日本を筆頭とするアジア諸国からの数多くの参加が期待されております。ペーパープロポーザルの締切は本年 12 月 1 日 (月) ですので、ふるってご応募ください。詳細は ABS 公式ホームページ (<http://absborderlands.org/studies/annual-meetings/>) をご参照ください。[地田]

◆ 学会カレンダー ◆

2014 年 11 月 20-23 日 ASEES (スラブ東欧ユーラシア学会) 年次大会 於サンアントニオ
<http://www.asees.org/convention>

2015 年 4 月 8-11 日 Association for Borderlands Studies (ABS) の第 57 回年次大会 於ポートランド市 ペーパープロポーザル締切り: 12 月 1 日

8 月 3-8 日 ICCEES 第 9 回大会 於幕張 <http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/iccees2015/index.html>

センターのホームページ(裏表紙参照)にはこの他にも多くの海外情報が掲載されています。[大須賀]

図書室だより

◆ 東京大学情報学環旧蔵新聞の一部移管 ◆

本年 7 月下旬、東京大学情報学環社会科学情報センター名で、耐震改修工事に伴う新聞原紙 (消耗品) の廃棄についての連絡が回付されてきました。

添付のリストには、171 タイトル、5,961 冊の外国新聞が列挙され、重要であっても現在は入手困難とおぼしきものがいくつもあるようです。しかし、新聞の保存と利用の両立はなかなか難しく、そもそも書庫の確保から難しいため、あまり手を広げることはできません。結局、本学の所蔵状況やニーズを考え、若干の新聞の移管先として手を上げたところ、以下の新聞原紙の移管を受けることになりました。

Заря Востока (Тбилиси) 1955.2-1968.12 28 冊
(北大所蔵は 1981-1988 (マイクロ)、990 (原紙))

Литературная газета (Москва) 1965.1-1968.12 5 冊
(北大所蔵は 1929-1941, 1944-1960 (以上マイクロ)、1946-1955, 1974-2013 (以上原紙))

Новое время (Санкт-Петербург) 1917.2-1917.10 4 冊
(北大所蔵は 1888-1916.10 (マイクロ))

- Сельская жизнь (Москва) 1964.9-1968.12 9冊
 (北大所蔵は 1997-2000, 2003-2007 (マイクロ)、1991 以降購読中 (原紙))
- Труд (Москва) 1964.9-1968.12 9冊
 (北大所蔵は 1921-1930, 1997-2007 (以上マイクロ)、1990-2013 (原紙))
- 計、5 タイトル、55 冊

このほか、いくつかのタイトルについて、手を挙げたものの先客ありということで来なかったものがあります。上記の資料はこの 10 月、北大附属図書館に到着しました。残りの資料の運命については承知しておりませんが、ここに含まれる重要な資料は、それぞれ新しいよい住処を見つけていることを願い、期待しております。[兔内]

◆ au Wi-Fi Spot の設置 ◆

大学の情報ネットワークは、運用方針上不特定多数の人に提供することができず、一時的な訪問者についても登録が必要です。こちらが Wifi の機器を導入して公衆利用できるように設定するのは容易ですが、そこで発生したパケットを大学の LAN に流すことはできません。登録していない人のパケットは、大学の情報ネットワークの外を通す必要があるのです。

電子ジャーナルやオンライン・データベースの利用など、大学の LAN に接続していないと使えないサービスはいろいろありますが、それはとりあえずなしでいいので、ネットにつなげたいという需要に (少しだけ) 応えるため、この 7 月、センターは KDDI 社に依頼して au Wi-Fi Spot を設置していただきました。

au のスマートフォンの契約者が利用できるほか、ワイヤ・アンド・ワイヤレス社に申し込み、短時間使用の契約をすることもできるようです。[兔内]

編集室だより

◆ 点検評価報告書 ◆

『スラブ・ユーラシア研究センターを研究する』No. 7 刊行



センターの点検評価報告書が、8年ぶりに刊行されました。内容は、「序：センターの沿革と理念」、「1. 管理運営」、「2. 研究活動」、「3. 共同利用・共同研究拠点」、「4. 次世代教育」、「5. 国際交流」、「6. 社会連携」、「7. 図書・出版・情報・広報」の各章に加え、外部アンケート調査と外部評価の結果を掲載したことが特色です。アンケートと外部評価では、センターに対する多面的で建設的な意見・評価をいただき、今後の活動のために有益な指針を得ることができました。ご多忙の中、外部評価委員を務めてくださった堀川徹、梶雅範、酒井正三郎、中田瑞穂、村田雄二郎の各先生と、アンケートにお答えいただいた共同研究員の皆様に厚く御礼申し上げます。

点検評価の対象が 8 年という長期にわたったこと、この間にセンターの活動が大幅に拡大・多様化したことを反映して、報告書は 224 ページという大部なものになり、取りまとめはほぼ 1 年がかりの膨大な作業になりました。結果として、近年のセンターの活動状況と、教員・研究員や滞在研究者の研究成果を知るのに便利なハンドブッ

クになったと自負しております。ウェブサイトにも掲載していますので、ぜひご覧ください。
[宇山]

<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/center/tenken/2014/index.html>

みせらねあ

◆ 高橋美野梨さんが地域研究コンソーシアム登竜賞を受賞 ◆



高橋美野梨さん(左)と塩谷哲史さん(右)

11月1日(土)にアジア経済研究所(千葉市)で、スラブ・ユーラシア研究センターも加盟する地域研究コンソーシアムの年次総会が開かれ、センターを受入機関としている高橋美野梨さん(日本学術振興会)が、著書『自己決定権をめぐる政治学:デンマーク領グリーンランドにおける「対外的自治」』(明石書店、2013年)で本年度の地域研究コンソーシアム登竜賞を受賞しました。高橋美野梨さんは、ボーダースタディーズ・セミナーでの報告、ABSやBRITといった国際学会・会議への参加、雑誌『境界研究』誌への論文投稿など、GCOE時代より特に北極圏・グリーンランドをめぐる境界研究について大きな学術的貢献

をされてきました。また、筑波大学の塩谷哲史さんも著書『中央アジア灌漑史序説:ラウザーン運河とヒヴァ・ハン国の興亡』(風響社、2014年)で同時受賞されています。塩谷さんは、2013年度・2014年度とスラブ・ユーラシア研究センターの共同利用型(個人)研究が採択され、センターの活動に貢献していただいております。[地田]

◆ 訃報 ◆

1990～1991年にセンターの運営委員を務められた、センター名誉研究員の佐藤経明横浜国立大学名誉教授・元日本大学教授が8月5日に逝去されました。享年89歳でした。氏は、日本の社会主義経済研究をリードされ、ソ連崩壊後もポスト社会主義の諸問題についての論客の1人として活躍されました。1980～1990年代のセンターの国際シンポジウムや研究報告会でも、報告者や討論者として毎回のように登壇され、センターが全国共同利用施設となった折の特別講演会(1991年1月24日)において、「バレストロイカの危機と市場経済への転換」と題する報告をされました。ご冥福をお祈り申し上げます。[田畑]



ノヴォデヴィッチ修道院のフルシチョフの墓前にて(2008年8月31日、田畑撮影)

◆ 人物往来 ◆

ニュース 138 号以降のセンター訪問者（客員、道央圏を除く）は以下の通りです（敬称略）。

[家田／大須賀]

- 8 月13 日 Riikka Lansisalmi（ヘルシンキ大、フィンランド）
- 8 月25 日 Juha Janhunen（ヘルシンキ大、フィンランド）
- 8 月26 日 Gulzat Egemberdieva（トロント大、カナダ）
- 8 月28 日 下里俊行（上越教育大）、鳥山祐介（千葉大）
- 9 月16 日 今井昭夫（東京外国語大）、坂川直也（京都大）、前田しほ（東北大）
- 9 月19 日 Gilles Campagnolo（フランス国立科学研究センター）
- 9 月22 日 田中大（同志社大）
- 10 月 2 日 Paul du Quenoy（バイルート・アメリカン大、レバノン）
- 10 月22 日 屋良朝博（沖縄タイムス元編集委員）
- 10 月29 日 Romuald Cudak（シロンスク大、ポーランド）、Magdalena Pastuch（同）、Ewa Sławkowa（同）、Jolanta Tambor（同）
- 11 月 1 日 エドワルド・パールィシェフ（筑波大）、寺島敏治（元釧路市史編纂事務局・地方史研究協議会）
- 11 月 5 日 山崎佳代子（ベオグラード大、セルビア）

◆ 研究員消息 ◆

田畑伸一郎研究員は 2014 年 6 月 9～15 日の間、境界地域研究学会世界大会における意見交換と北極圏研究に関する聞き取り、及び打ち合わせのため、フィンランド、ノルウェーに出張。また 8 月 11 日～9 月 29 日の間、欧州比較経済体制学会での報告及び資料収集のため、スウェーデン、フィンランド、ドイツ、ハンガリー、ロシアに出張。

岩下明裕研究員は 7 月 16～19 日の間、科学研究費研究におけるコンファレンス出席・発表、意見交換のため、シンガポールに出張。

越野剛研究員は 8 月 24 日～9 月 5 日の間、科学研究費研究における資料収集のため、ロシア、中国に出張。

野町素己研究員は 8 月 28 日～9 月 9 日の間、科学研究費研究における現地調査、学会出席・発表のため、セルビア、スロヴェニアに出張。また 9 月 17～27 日の間、科学研究費研究他におけるコンファレンス出席・発表、協定のための打合せのため、アメリカ、ポーランドに出張。

望月哲男研究員は 9 月 3～8 日の間、翻訳関係のコンファレンスへの出席のため、ロシアに出張。

兔内勇津流研究員は 9 月 3～10 日の間、科学研究費研究における資料収集のため、ロシアに出張。

家田修研究員は 9 月 7～16 日の間、科学研究費研究におけるコンファレンス出席および現地調査のため、ハンガリー、スロバキアに出張。

長縄宣博研究員は 10 月 10～26 日の間、科学研究費研究他におけるコンファレンス出席・発表、研究打合せ・資料収集のため、ロシアに出張。[事務係]

目 次

研究の最前線.....	1
2014 年度冬期国際シンポジウム「境界：ユーラシアで交差する動力」開催予 告」／ JIBSN：シンポジウム「日本初の国境観光を創る：北海道・稚内の挑 戦」の開催／セミナー《Seeing History: Photo and Film as a Primary Archival Source》おこなわれる／シロンスク大学の研究者来訪／専任研究員セミナー／ 研究会活動	
人事の動き.....	5
仙石学氏の着任	
北海道で過ごした夏 by デイヴィッド・マープルス.....	6
学界短信.....	10
UBRJ: Call for Papers 57th ABS Annual Conference in Portland / 学会カレン ダー	
図書室だより.....	10
東京大学情報学環旧蔵新聞の一部移管 / au Wi-Fi Spot の設置	
編集室だより.....	11
点検評価報告書『スラブ・ユーラシア研究センターを研究する』No. 7 刊行	
みせらねあ.....	12
高橋美野梨さんが地域研究コンソーシアム登竜賞を受賞 / 訃報 / 人物往来 / 研 究員消息	

2014 年 11 月 20 日発行

編集責任	大須賀みか
編集協力	宇山智彦
発行者	家田修
発行所	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 060-0809 札幌市北区北 9 条西 7 丁目 Tel.011-706-3156、706-2388 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/
